

# ハイデガーに於ける自然の問題

—『存在と時間』より一九三〇年代にかけて—

岡 田 道 程

## 一、自然に於ける三つの意義区分

ハイデガーの許で一九二〇年代ようやく定まるに至った問題設定「存在の意味への問い」は、そこで問い求められている対象（存在、存在の意味）の内に、直接ピュシス(φύσις)を数え入れてはいない。φύσιςとはこの場合、単にギリシア語に翻訳された限りでの「自然」を意味するにとどまらず、後の三〇年代以降の究明が次第に明らかにするように、タベの国(Abendland)の最初の始源にあたる古代ギリシアに於いて、その思索活動の内に始源的に開示され得た限りでの「存在」そのものを名指す一つの語にはかならない。それ故、ハイデガーが自らの思索の道行きに於いて最初に打ち建てた記念碑的労作である『存在と時間』の内にこの語の使用が認められないということは、そこではいまだにφύσιςが思索の根源語としては視圈の内に収められてはいないことを意味している。だがそのことは、逆に同書が「自然」というものを問題設定の射程に捉え入れてはいないことを直ちに意味するものではない。「自然」の問題

は、同研究に於いては差当り、第三章「世界の世界性」(第一四節と第二四節)の分析のなかで、言わば副次的主題として追究されている。

『存在と時間』は、自然の概念を次の三つの意義に於いて区別する(ただし、第三の語それ自体は同書以外からの命名である)。

- (i) 手許に在るもの(Zuhandenes)としての自然
- (ii) 直前に在るもの(Vorhandenes)としての自然
- (iii) 自然的自然

先ず最初の「手許に在るもの」としての自然は、「廻り世界」Umweltの内で見えされる限りでの自然である。この場合の廻り世界とは、そのなかで現存在が現存在としてまさに事実的に《生きている》「我々の世界」Wir-Weltのことであり、すなわち最も身近な「家庭的(Häuslich)」世界および「公開的(öffentlich)」世界を謂う(§ 87)。ところで、この「廻り世界」に於いては、製作されるべき作品は、それ自身の内に使用の「何のため」「何から」そして「使用者」への指示を同時に含み入れている。この場合の「何か

ら」は、製作物にとって材料もしくは素材に相当するが、それは最終的には「それ自体として製作を必要とせず常に既に手許に在る」(S. 94) ような存在者にまで溯源せざるを得ない。このような存在者が、「手許に在るもの」としての自然である。一例を家庭的世界の内に求めるなら、一足の靴はそれ自身に於いて皮や糸や釘に依拠しているものの、その皮は更に或る動物に、その糸は更に或る植物に、その釘は更に或る鉱物にそれぞれ依拠せしめられている。同様にして公開の世界に於いても、例えば外灯は直接的には夜の暗がりを考慮に入れ、間接的には太陽の位置さえも考慮に入れて製作されている。このようにして使用される道具の内には、その使用を通じて自然が、しかも「自然の産物」Naturprodukte という明るみに於いて発見されているのである。しかしそれは、所謂「自然の威力」Naturmacht という意味で了解される自然ではない。「森は営林であり、山は石切場であり、河は水力であり、風は《帆にはらむ》風である。」(S. 94) それ故、身近に目立つことなく手許に在る道具の使用の内には、このような仕方でも都度「廻り世界の自然」Umweltnatur が出会われ、発見されているのである。

これに対して、「手許に在る」という在り方が見逃され度外視される場合には、自然は、それ自体単なる直前に於いて規定されるものへと変容する。「直前に在るもの」としての自然は、所謂《世界》に於いて又その《世界》と共に発見されるものである。ところで、この場合の所謂《世界》とは、「世界の内部に於いて直前に在る存在者の一切」(S. 87) として規定されるものであるが故に、直前に在るものとしての自然も亦、このような意味で多様な形で直前

に在るものの「統一態」(S. 92) を意味し、内世界的に出会われる存在者の存在構造の「範疇的総体」(S. 88) を指し示している。それ故、この第二の意味での自然は、日常的な現存在にとって最も身近にある廻り世界の内でも発見され得る自然でもなければ、所謂「自然の威力」という意味で了解される限りでの自然でもない。それは、学問的研究に於いて理論的認識の対象となり得るものである。「植物学者の謂う植物は畦道に咲く花ではなく、地理学的に確定された河の流れの《淵源》は《地底の湧き清水》ではない。」(S. 95)

他方、「自然的な自然」とは、「所謂《躍動し邁進する》ものとしての自然、不意に我々を襲うものとしての自然、土地風土としての心の心を捕えて離さない自然」(S. 95) のことである。それらは孰れも、直前に在るといふ仕方でも発見される自然を前にしては、常に覆蔵(かく)され続けている。しかし、この第三の意味での自然は、例えば鉄鉱石という「自然の産物」の場合がそうであるように、そのすべてが我々の身の廻りの廻り世界の内でも発見され得るものなのであろうか。否、そうではない。必ずしもすべての自然が、差当り常に使用と製作のための「見廻し」Umsicht (S. 93) の眼差しによって発見されるわけではない。ハイデガーは、以下のように明確な区別を設けている。「我々を《取囲む》《自然》は、確かに内世界的な存在者であるにはちがいないものの、しかしそれは手許に在るものの存在の在り方を示すこともなければ、《自然物性》(Naturding-Ichtheit) とし、この意味での直前に在るものの存在の在り方を示すこともなく。このような《自然》の存在がどのような形で解釈されるにせよ、内世界的に存在するものの存在様態の一切は、存在論的に

は世界の世界性 (Weltlichkeit der Welt) の内に、それ故にまた世界 = 存在 (In-der-Welt-sein) の現象の内に基礎づけられているのである。」(S. 280)

ところで、『存在と時間』の全体を通覧する場合、右の最後の意味に於いて「自然」が言及される例は、上記の用例をも含め極めてまれであると言わざるを得ない。従って、そこからは幾つかの疑問が湧き起る。先ず第一に、我々を取囲む自然は他の二種類の自然の在り方に対し、如何なる関係にあるのか。更に、当面(第三章)の中心的論題で「世界の世界性」にとって、この自然的自然は如何なる位置づけを与えられているのか。つまり、直前に在る『世界』の内で見られるのではなく廻り世界に於いて出会われるのでもないとするれば、果してそれは世界性の現象 (S. 26ff.) そのものと共に開示され得るのであるか。——これらの問いは、後に指摘されるように、確かに彼自身の思索にとってさえ中・後期にまで持越されるべき諸課題を内蔵している。だが少なくとも我々は、次の点だけはこの場面で確認することができよう。すなわち、『存在と時間』の探究は、殊更自然を自然として主題化しようと試みてはいない。しかしそのことによって、他方同研究が最初から自然そのものを視野の内に収め入れてはいないとする批判も亦、的を得たものではない。寧ろ、同研究に於ける関心の照準は、手許に在るものとしての自然と直前に在るものとしての自然の区別、および前者から後者に至る変換の一点に狙い定められていると言われるべきであろう。以下、その概略を示すことにする。

一般に、この「自然」という語がほかに何の付加語も注釈もなく

登場してくる場合、それは常に直前に在るものとしての自然を名指している。言い換えるなら、『存在と時間』の探究は、究極的な目標である世界現象の解明へ至る移行と準備のための「最初の特徴づけ」(3)として、廻り世界的な存在者の存在論的構造すなわち手許に在る自然を考察の対象としているものの、しかしそのような自然は、理論的認識にとってはより近いものの日常的にはより遠くにある直前存在的な自然に対し常に対照化されている。しかもその際、後者の場合の自然は、『自然』とはこの場合カント的に近代物理学の意味に於いて考えられている (S. 26ff.) という或る欄外註の指示からも知られ得るように、近世自然科学に於ける数学的・物理学的自然の意味に当面限定を受けているのである。三つの用例に基づき、先ずそのことから明らかにすることにしよう (傍点は孰れも引用者の手による)。「物理学に於ける相対性理論は、自然そのものの固有の連関を、それが《即自的に》在るがままに取出そうとする趨勢の内から生じてきている。自然そのものへの接近の諸条件の理論として、相対性理論は、運動諸法則の不変性を一切のものの相対性という規定を通じて堅持しようと試みており、又そうした試みによって、理論それ自体にとっては予め所与の事象領域の構造への問いの前に、すなわち物質の問題の前に自ら直面する。」(S. 13, Vgl. S. 52A) (4)「事実、カントの純粋理性批判のなした遂げた積極的收穫は、自然一般にまさに属しているもの、そうしたものの発掘を最初に手懸けた点にあるのであり、決して認識の《理論》の内にあるのではない。カントの先験的論理学は、自然という存在領域のア・プリオリな事象論理学である。」(S. 14)「学問の世界的発展を示すとと

もにその存在論的生成をも同時に示す古典的な例は、数学的物理学の成立である。この数学的物理学の形成にとって決定的な事柄は、《事実》の観察のより高い評価にあるのでなければ、自然の諸事象の規定に際し数学を《適用する》ことにあるのではなく——自然そのものの数学的企投 (mathematischer Entwurf der Natur selbst) の内にひそんでいる。かかる企投は先行的に先ず、常立的に直前に在るもの(物質)を発見し、へそする事で、この常立的に直前に在るものによって量的に規定され得る構成諸契機(運動、力、場所、時間)へと専ら主導的に眼差しを向けさせるための地平を開披する。このような形で企投された自然の《光のうちで》初めて、何か《事実 (Tatsache)》としようなものが見出され得、それが、企投に基づき規程的に制限されている実験に対して設定されるのである。」(S. 479)

ところで、手許に在るものから直前に在るものへの変換は、世界性の現象の「飛び越し」Überspringen (S. 88) と呼ばれる出来事の内では生起する。この出来事に付随する動向の幾つかを、同時にそれを阻止するためハイデガーが敷設した防止策と共に指摘するならば、次のとおりである。

(i) 先ず最初に、内世界的に存在するものが世界の現象の代りに存在論的主題として飛び込んでくる (einspringen)。その結果、差当り身近には発見されることとなり直前に在るものとしての自然の側から、《世界》が逆に解釈されることになる。しかし、このような存在者の接合と合成によっては、そもそも世界なるものは構成され得ることがない。世界性の現象および差当り出会われる存在者を飛

び越すことは、後から簡単に取返しのできような出来事ではなく、直前に在るにすぎない自然は、たとえ如何なる方途を辿るにせよ世界そのものには決して行き当たることはない (S. 134, 88, 97)。——それ故、世界性の現象への接近には、この飛び越しを阻止するための飽く迄現象に即した予防策が予め講じられる必要がある。「世界」内「存在」としての現存在の存在の根本構制が、これにあたる (S. 71)。

(ii) 次に、廻り世界が、それに固有の「廻り」Drehenおよび「帰着」Bewandnis 性格を喪失することで、自然世界 (Naturwelt) へと変貌する。「脱世界化」Entweltlichung と呼ばれる事態である。又、「廻り」ということの内には空間性への或る指示が含まれており、従って空間の性格も亦、世界性の構造に基づいて初めて解明されねばならない。だが、それにも拘らずこの「廻り」性が世界から失われることで、逆に空間性を出発点として《世界》が解釈されるに至る。すなわち、内世界的に手許に在るものの空間性は、等質な自然空間 (homogener Naturraum) へ変質し、手許に在る道具立て全体としての世界は、単に直前に在るにすぎない延長物の聯関へと変容する。後者の事態は、「空間化」Veräumlichung と呼ばれる (S. 156) —— 従って、これらの出来事を回避するためには、範疇としての「内部性」Inwendigkeit から実存疇としての「内」存在 In-Sein が存在論的に明確に区別される必要がある (S. 75)。

(iii) 存在するものは、それに対する接近の仕方に応じて、その都度様々な仕方ですれ自らを、しかもそのもの自身の側から示して行く。従って、認識するということも亦、それ自体世界「内」存在に

よって基礎づけられるべき一つの在り方であり、しかもそれは常に、手許に在るものを経由しそれを通り抜けることで初めて、単に直前に在るものの発掘へと突き進んで行くはずのものである。しかし、それにも拘らず世界への問いが内世界的に在るものへの問いへと狭められることで、数学的・物理学的認識のみが唯一適切な接近通路と看做されるに至る (S. 80ff., 96, 117f.; 128, 133f.)。——それ故に我々は、主観⇌客観の關係として設定される認識の一切に先立ち、先ず「我々自身は、常に既に或る何らかの存在了解 (Saisverständnis) の内で活動してゐる」という一つの「事実」Faktum から出発しなければならぬ (S. 7.)。

(iv) 更に、世界現象の飛び越しには、同時に世界⇌内⇌存在としての現存在の存在構制の誤認が提携し合つて生起する。それは、心、自我、主観ないしは主体、精神もしくは人格、或いは意識と執れの形態を取るにせよ、人間の本質構造を最初に実体 (Substanz) として措定する措置であり、その前提の上に自然の認識、《世界》の諸考察を繰り抜けて行こうとする方途である。——従つて、そのような仕方では、最初から断ち切るためには、「現存在の《本質》は、その実存の内に根差している」「人間の実体は実存である」(S. 156, 281, 416) と、<sup>(5)</sup> 根本的洞察が、問題設定の前提から探究の全体に至るまで常に先導している必要がある。実存性の実体性からの存在論的区別が、その都度要求されるのである。

ところで、以上輪郭と概要についてのみ素描された四つの観点のすべてにまたがり、それらを最も極限的な方向にまで追求した事例が、第一九節以下に於いて、デカルトの《世界》存在論の批判的考

察という形で遂行されている。「以下の究明は、デカルトに先立つ世界の解釈はなおさらのこと、デカルト以降に登場してくる世界の解釈が、根本的には未だに論議されたことのない如何なる存在論的《基礎》の上で動いているのか、ということを確認せしめようとするものである。(S. 119) すなわち、ハイデガーの解釈によれば、デカルト自身は世界の存在論的な根本規定を延長 (extensio) の内に求め、しかもこの延長を空間 (spatium) そのものと同じ視することによって世界への問いを自然物の物性への問いに狭め、数学的・物理学的認識としての直観 (intellectio) をこのようにして狭窄化された内世界的に直前に在るものへと至るための唯一の接近通路と看做すとともに、思惟する事物 (res cogitans) さえをも延長する事物 (res extensa) と同一の存在の在り方をするものとして、つまり実体として把握することから出発していた。それ故、成立史的には『三二四年(冬学期)講義』(表題は『近世哲学の端初(デカルト解釈)』)の内に直接の由来をもつ、『存在と時間』第一九節(第二一節に於けるデカルトの《世界》存在論をめぐる批判的分析も亦、このようにして同論稿の内に組込まれること)で、新たに「廻り世界の空間性」および「現存在そのものの空間性」の解明という積極的課題に対し提供されるべき消極的手懸りの役割を獲得する (S. 119)。

## 二 Natur から *obars* へ

だが、ここで一つの疑問が生じる。それは、上掲箇所では「デカルト以後」に登場すると漠然と謂われ、「デカルトに先立つ」と指摘されている伝統的《世界》解釈の有効射程域である。前者について

は、後年書き付けられた一つの欄外注によって、それがまさに現代にまで波及するものであることが明らかにされている。「フッサールの説く《諸存在論》の組織構造に対する批判。総じて、デカルト批判の全体が、このようなフッサール批判の目的でこの箇所に至るまで設定されてゐる。」(S. 132R.) 事実、この注で指摘される本文は、デカルトが「物質的自然」materielle Natur という特定の内世界的存在者を根拠に据え、その基礎層の上に他のすべての存在者を階層的に積み上げていくとする解釈に対し批判を試みている箇所(第二節)であり、他方第一〇節の原注には、フッサールの当時未発表の論文『純粹現象学及び現象学的哲学のための考想』第二部に於ける階層的存在論の構造——一、物質的自然の構成 二、動物的自然の構成 三、精神的世界の構成(自然主義的態度に対する人格的態度)——が明記されているのであるから(S. 65A.)、上記のフッサール批判は、当時本文中に於いても既に暗示されていたと言われるべきかもしれない。「デカルトの世界存在論」に対する批判は、根本的には「今日なお一般に流布している『世界存在論』の批判にまで連なっているのである(S. 134.)。では他方、「デカルトに先立つ」と謂われる後者の範囲は、どの地点にまで溯及するのであるうか。我々は先ず、その点に関する示唆がわずかに垣間見られ得る第六節中の記述に注目しなければならない。「この《中世存在論》に対するデカルトの依存的射程は、予め古代存在論の意味と限界が存在の問いへの方向づけに基づいて明示される場合に、初めて査定され得るものとなるのである。言い換えるなら、破壊(Destruktion)は、古代存在論の地盤を時性(Temporalität)の問題性の明るみの

内で解釈するという課題に直面している。ここで頭わとなるのは、存在するものの存在をめぐる古代の解釈が、所謂《世界》ないしは最も広い意味での《自然》によって方向づけられており、しかも実際には、それが存在の了解を《時間》の内から獲得している、という事実である。(S. 24) ところで、「存在するものの存在をめぐる古代の解釈が、所謂《世界》ないしは最も広い意味での《自然》によって方向づけられている」と言われるのは、世界の現象の飛び越しとして既に指摘された点であり、しかもその出来事は、古代存在論の解釈にのみ限定されるものではなかった。しかし、それに続く記述は、この飛び越しの由来が時間性に基づく或る特定の存在了解に根差すことを明らかにしている。「存在と時間」第一部第三編以降に残された探究の課題は、現存在の時間性の内から獲得される存在一般の時間性、「時性(テンポラリテート)」の地平に立つて、そこから古代より現代に至る諸存在論の成立基盤を解き明かすと同時にそれらを破壊することを意図していた。しかし、そうした課題が既定の設問方式によっては最早解かれ得てはいない以上、この点に關しては多くの部分が不明である。だが、それにも拘らず上記の飛び越しの発現の処在の究明は、この未完の研究の中心問題に属しているが故に、「時間」の内から獲得される」と謂われる一定の存在了解の内容を現行の著作中に捜し求め、その基本的方向を見定めておくことは肝要であらう。以下、古代存在論、デカルト、フッサールの順でそれぞれ検討を試みることにする。

(i) 古代存在論 前記の引用に続く記述は、存在するものの存在をめぐる古代存在論の解釈が時間の内から一定の存在了解を獲得

する事実が、その手懸りを一つの「外的な証拠記録」に求め得ることを指摘している。一つの外的な証拠記録とは、この場合 *rapporter* もしくは *advise* と「語」である。これらは、存在論的・時性的には「臨現性」Anwesenheitを意味してゐる。すなわち、ギリシア人にとって存在者の存在は、存在するものが臨現しつつあることとして了解されている。それ故、臨現性こそが存在の意味である。その場合、存在者がその存在に於いて「臨現性」として把握されるということは、同時にその存在者が「現在 (Gegenwart)」という或る一定の時間様態を顧慮して「了解されることにほかならない。アリストテレスの許で、先行的には既にバルメニデスに於いて「何か直前に在るものをその純粹な直前性の内で端的に聴取する」はたらしきを意味する *poiein* は、時性的には「或るものを純粹に《現前化》する *ποιεῖν*」reines Gegenwärtigen (von etwas) と「構造を蔵してゐる (S. 34f.)」——このように、第六節(序)では予告されるにとどめられていた上記の観点は、その具体的分析の遂行を第三編の内に委ねてゐるのである。

(iii) デカルト デカルトの場合を最も極端で尖鋭な事例として取上げる第十九節以下の分析も亦、世界現象の飛び越しの起源が時間性に依拠する或る一定の存在了解の内に根差すことを指摘している。その際、直接の契機となるのは、「哲学原理」第一部第四節に於ける「物体の本性」(natura corporis)をめぐる規定である。デカルトはそこで、物体から一切の感覺的性質が取除かれる場面を想定し、その場合ですら物体には物質そのものが残存していることを根拠に、物体の本性が物質 (materia) すなわち延長 (extensio) に

依存することを論定する。延長こそが、物体的事物としての存在者の存在をなす。何故なら、可分割性・形態・運動等さまざまな変化を受容れる (capax mutationum) と同時に、それら一切の変化を通じて自ら持堪え続ける (remante) ものこそが、最も本来的な存在者にほかならないはずだからである。ハイデガーの着眼も亦、この点にある。「物体的事物に於いてこのような常立的残留 (ständige Verbleib) を満たすものが、そのものに於ける本来的存在者であり、しかもそのような常立的存留によって、実体の実体性は性格づけられるのである。」(S. 123) それ故、この「常立的残留」と呼ばれる存在の時間的性情——ほかにそれは「常立的直前性」ständige Vorhandenheit 或は「恒常的直前性」beständige Vorhandenheit の名称で言い換えられし「(S. 128, 132)——こそが、実体概念の内に包み隠されてゐる「或る一定の存在理念」として規定され得る。「デカルトは、内世界的に在るものの存在の在り方を、この存在者へそれ自身」の側から申し述べさせるのではなく、その起源については未だ露現してゐないばかりかその正当性に関して示されてもいないような或る一つの存在理念(存在に常立的直前性)を根拠として、世界に對し言わばその《本来的》存在を指定してゐるのである。」(S. 128) このような一定の存在理念の導入の起源は、それ自体明確に指摘されてはゐないものの、(i) と照合するなら、「臨現性」すなわち「現在」という特定の時間様態およびそれに依拠する特定の存在了解の内に根拠づけられてゐる、と看做されるべきであろう。それは、後の第八〇節以下に於いて「個個すべての今の内で個々すべての人にとって直前に在るものの、そ

の臨現性に於ける現前化」(S. 55c) もしくは「今それ自身の常立の臨現性」(S. 55b) として名指されるところのものに、相当している(後者に対する原注が、逆に上記の第二二節を指示する点に留意)。——事実、『存在と時間』の探究は、デカルトの世界存在論をめぐる一連の批判的考察を締括るにあたり(第二二節)、来るべき第一部第三編を予想しかつ予告しながら、そうした批判の哲学的正当性が、本来「存在一般の概念に対しその了解性を可能にする地平が指し示され、そのようにして初めて手許性および直前性も亦存在論的に根源的に了解される」(S. 134) 場合にのみ獲得され得ることを指摘し、又同箇所に対する欄外注によるなら、この場合の「了解性」は「企投すること」に、「企投すること」は又「脱自的時間性」にそれぞれ依拠することを明らかにしている。それ故、時性という問題設定を手懸りに「存在論の歴史を破壊しつつ帰行する道」を具体的に辿ることを意図する第二部の構想の内には、このようにして、デカルト自身にとつては哲学上の或る新たな確実な地盤の確保として要求されていながら、その「存在の在り方」「存在の意味」については無規定のまま放置されている「《cogito sum》の表面には現われ出していない存在論的諸基礎」を取出そうとする第二編の課題も亦、属しているのである(S. 33, Vgl. S. 53, 120)。

(iii) フッサール 見廻しの配慮が内世界的に直前に在るもの理論的発見へと変貌する過程を、その時間的意味に向けて考察を試みる第六九節bは、自然すなわち物理的自然の数学的企投に属する諸構造の全体を「主題化」Thematisierungの名で総称する。これらの諸構造には、廻り世界という制限の撤廃とともに主導化する存

在了解の変容、つまり存在が直前性の意味に於いて了解されるに至ることを初めとして、かかる存在了解の変容に導かれて生起する直前に在るものの領域の画定、更にはそうした存在者に適合する概念規定の下書き、すなわち方法、真理と確実性の可能性、根拠づけと証明の仕方、規範性・精確さ、拘束性・伝達の在り方の決定等が属している。しかしながら、この主題化に最も固有のはたらくは、内世界的に出会われるものを明け渡すこと、しかもそれが純粹な発見に対しそれ自らを《対投》し得るような、つまり《対象(Object)》となり得るような形で明け渡すことにある。それ故、主題化は同時に対象化である。「内世界的に直前に在るものの許に対象化しつつ存在することは、或る卓越した意味で現前化(Gegenwärtigung)という性格をもつ。このような現前化は、取分け当該の《数学的自然》科学の発見が唯一直前に在るものの被発見性のみを予期するという点で、見廻しに於ける現在(Gegenwart)とは区別されるのである。」(S. 180) ところで、同箇所に対する原注は「《一切の認識は直観をめざす》という提題が、《一切の認識は現前化である》という時間的意味をもつ」点に注意を促し、この「現前化」という表現の使用について、フッサールの『論理学研究』(第一版)第二巻を参考に挙示している。そして又同注の末尾には、フッサールの現象学に於ける「意識の志向性」それ自体が「現存在の脱自的時間性」に依拠するものとして解明され得ることが、次編すなわち「存在と時間」第一部第三編の遂行課題として予告されている(S. 480 A.)。

さて、以上の検討を踏まえ、自然に於ける三つの意義区分を前提

としながらも、『存在と時間』の研究が、主として手許に在るものとしての自然から直前に在るものとしての自然への変換および前者に対する後者の優勢という点に考察の主眼点を絞っていることが、明らかにされた。それ故次に、我々はこうした設問の形式に対し、それ以降の思索の深化がこの「自然」の問題をどのような方向へ展開させているかについて追究して行かなければならない。

先ず最初に、『存在と時間』の探究内に於ける「自然」の位置づけを考慮に入れつつ、新たな角度から論究を試みた二種類の論稿に目を向けることにしよう。

(i) 最初の変遷を示す論文は、同書出版の二年後、一九二九年に寄稿された論文『根拠の本質について』の、その注のなかで登場する。そこでは、一定の注解のもとに「自然」の問題がより本来的な処在へ向けて解釈し直されてはいるものの、それは決して『存在と時間』の構想それ自体の変更もしくは修正を意図するものではない。「しかし、このような方向に定められた現存在の分析に於いて、自然が見掛け上欠如しているかに見えるかすれば——自然科学の対象としての自然だけにとどまらず、或る根源的意味での自然も亦（この点に関しては『存在と時間』の六五頁を参照）——それには幾つかの理由がある。決定的なことは、自然とは、廻り世界の範囲内で出会われ得るものもなければ、そもそも第一次的に我々が自身を関わらせているところのものとして出会われ得るものでもないという点にある。自然は、根源的には現存在の内て顕わとなるのであり、しかもこの現存在が情態的に気分づけられているものとして存在するもの、ただなかで実存するということで、顕わになる。」とここで、

情態性（被投性）が現存在の本質に属し、関心（Sorge）の全概念の統一態の内て表現されている限り、この情態性の内でのみ、初めて自然の問題に対する基盤は獲得され得る。」<sup>(8)</sup>最後の文脈は、同年に行われた講演『形而上学とは何か』との内容上の連続性を予想させる。そこでの主題の中心は「無」であり、無とは、存在者の側から経験される限りでの「存在」にはかならない。無はそれ故、何らかの存在者もしくは存在者の領域として、学問的態度によって対象化されるようなものではあり得ない。無は、現存在に於ける根本情態性としての「不安」を介して初めて顕現し、しかもそれは「存在するものの全体」が滑落することと一体になって顕現する。無は、無化する。無化によって初めて、現存在は存在者そのものの前に齎され、自己自身に対し又他の存在者に対してそれ自らを関係づけることが可能となる。言い換えるなら、現存在は言わば「無の場所の番人」として、予め無の内へ保持されているのである。だが、この「現存在が無の内へ保持されている」ということ Hinvingebundenheit *des Nichts* は、同時に現存在が存在するものの全体を予め越え出ていること、すなわち「超越すること」*transzendieren* を意味している。ところで、ギリシア語の *herá ta pará ta* に由来する「形而上学」という名称は、後世、*ta pará ta* つまり「存在するものとしての存在するもの」を越え出て問う問いとして解釈されるに至るものである。しかしながら、かかる超越は現存在に於いてのみ生起するのであるから、形而上学は現存在に於ける根本生起であり、現存在そのものですらある。<sup>(10)</sup>

『存在と時間』および上記の『論文』と『講演』の孰れに於いて

も、超越するもの (Transzendens) すなわち現存在がそこへと予め越え出ているものとして把握されている「存在」「世界」「無」<sup>(11)</sup>および根源的な意味での「自然」——これら相互の関係については、必ずしも明瞭にされているとは言いがたい。しかし、一九二九年のこの時点で、「自然」が *ca. quod* すなわち「存在するものとしての存在するものの全体」*das Seiende als Seiende im Ganzen* として、より始源的な方向に向けて説明し直されていることは、翌一九三〇年以降再三にわたる講演と共に推敲が重ねられて行く論稿『真理の本質について』に於ける問題の展開と比較する場合、そこに至る過渡的予兆を示すものという意味で注目し値する。何故なら、同論稿を通じて初めてピュシス (*physis*) の語が、存在の始源的本質を名指すものとして彼の思索の前に齎されているからである。「いまだに概念化されることもなく、何らかの本質の根拠づけさえ必要とはしていない」とはいうものの、最初の思索家が「存在するものとは何か」という問いをもって存在者の不覆蔵態 (かくれなさ) の前に問いつつ立ち向かうその瞬間に、歴史的人間の脱<sup>11</sup>存は開始する。この問いによって初めて、<sup>12</sup>「存在するもの」の不覆蔵態 (かくれなさ) が経験されるのである。〈その際〉存在するものの全体がそれ自らを *physis* として、『自然』として顕現させるのであるが、自然 (*physis*) とはこの場合、いまだに存在するもの或る特定の領域を意味するには至っておらず、存在するものの全体 (*das Seiende als solches im Ganzen*) をしかも立ち現われつつ臨現する <sup>13</sup> *physis* (das aufgehende Anwesen) という意味で言い表わして「<sup>14</sup>」

(iii) 他方、これに対し第二の変遷を示す論究『三四／三五年(冬学期) 講義』(すなわち『ヘルダーリンの讃歌』ゲルマーニエン) 及び《ライン》に於いては、自然そのものが、近世自然科学の対象領域として限定される自然に対峙するものとして取上げられている。「一切の自然科学に先立つ——自然」*Natur—vor aller Naturwissenschaft* が、ここでは最も根源的な意味での自然として規定されるのである。例えば、詩の解釈と解釈の間に挿入されている小節『詩作的な自然了解 (*dichterisches Naturverstehen*) と科学的な自然表象 (*wissenschaftliche Naturvorstellung*) の区別』——その表題それ自体が、既に「存在と時間」からの距離を示す指標の役割を果しているが——の冒頭は、次のように主張する。「我々は、河の流れが単に或るものの『形象』ではなく、それ自体として意味をもち、河の流れとすることで故郷の土地 (*heimische Erde*) が意味されていることを承知している。しかし、この場合の故郷の土地とは、地学より天文学にまで至る自然科学の対象領域という意味で、地球とこの惑星に於いて何らかの方法で精確に測定された限りでの陸、水、植物、大気からなる一領域のことではない。そもそもそれは、近世的な意味での『自然』ではない。何故なら、自然 *natura* すなわち言葉の始源的命名力に於ける *physis* のもつ形而上学的意味は、既に〈それ自体〉存在 (*physis*) の一つの本質的解釈であり、そうした解釈は、自然科学とは何一つ関係をもたないからである。』<sup>15</sup> *physis* とは、それ自体「存在」の本質的解釈をなすものとして、ギリシア人の許で開示され、言葉に齎された限りでの「根源的自然」である。しかし、歴史的に見るなら、それは二つの外的勢力によつ

て脱<sup>レ</sup>自然化させられている (de-naturiert) ことも亦、忘れられてはならない。すなわちハイデガーの解釈によるなら、一つには、自然を先ず《被造物》へ降格させ、と同時にそれを超<sup>レ</sup>自然 (恩寵界) との関係内に持込んだ「キリスト教」によって、一つには、自然を世界交通、工業化および機械技術といった数学的体制の勢力範囲の内に解消した「近世自然科学」によって、である。ところで、このようにして脱<sup>レ</sup>自然化された自然概念に対し、近世のただなかに位置しているにも拘らず、詩人ヘルダーリンが自らの詩作を通じて殊更「自然」を名指し、言葉の内へ呼出せうとする時、その意味するところは最早上記の自然概念ではなく、「存在自体そのもの」 *Sein als solches* にほかならない。(16) ハイデガーは、ヘルダーリンが詩作する「自然」とギリシア人が思索する *physis* の間に、或る密接な内的聯関を讀取ろうとする。そしてこのような試みは、更にそれに続く思索の過程でより明確に追究されている、と言うことができよう。何故なら、後者の *physis* に於ける「ギリシア人の根本経験」については、その具体的な解明作業が翌年の『三五年(夏学期)講義』以降に委ねられる一方、前者のヘルダーリンに於ける「存在自体の或る新たな根本経験」については、一九三九年より翌四〇年にかけて繰返される講演『あたかも祭の日のように……』の内へと受継がれているからである。後者の *physis* について、ここでは一言だけ指摘しておこう。『三六年(夏学期)講義』によれば、*physis* は「立ち現われること」 *Aufgehen* を意味しており、しかもこのことは、取分けギリシア哲学の最初の始源の内て明瞭に告知され、後のプラトンやアリストテレスの許でも消滅することなく痕跡としてな

おも伝承されている。例えば、薔薇は花を綻ばせながら立ち現われてくる。立ち現われるとは、この場合「それ自らをそれ自身の内から展開させつゝ示すこと」 *in sich aus sich entfaltend sich zeigen* である。それ故、自然という言葉で我々が思い浮べる外的な自然、例えば風景のようなものは、こうした本質の意味での *physis* の特定の領域にすぎないのである。「*physis* とは、それ自身から立ち現われ、そのようにして統べつゝ臨現すること」 (*die von sich her aufgehen- de und so waltende Anwesenheit*) という意味での存在そのものを名指す、始源的なギリシアの根源<sup>レ</sup>語である。(17)

このようにして、自然をその根源性に向けて問い直せうとする三〇年代以降の探究は、一方に於いて夕べの国の歴史の始源に現出する根源語の一つ *physis* の許に溯源し、他方ではそうした夕べの国に來たるべき歴史的運命を予め見通しながら、それを言葉の内に表示しようとした詩人ヘルダーリンの詩作に於ける一根源語としての「自然」の許へ求めている。だが、前者に於ける回想的思索と後者に於ける詩作的思索は、異なる二つの営みではない。ハイデガーの思惟の内部では、両者は常に同一の土壌に根差す同一の根莖に由来している。「形而上学による最終的な誤解を投捨てた瞬間、言葉を換えるなら存在自体そのものとその真理 (*Sein selbst und seine Wahrheit*) が初めて極端な形で問うに値するものとなった瞬間(一九二九/三〇年の真理に関する講演)、それまで既に他の詩人たちと同様親しく知られていたヘルダーリンの言葉は、運命となったのである。」(未公開の手記「性起」より)(18)

しかし我々は、このような「ピュシス」および「自然」の問題を

めぐる思索の変遷を別稿に於いて検討する前に、この問題が、既に『存在と時間』の内での或る別の角度から、すなわち現象学に於ける「現象」への問いという形で遂行されており、従って三〇年以降に掘り下げられる新たな課題も亦、そのなかで間接的に準備されていることを前以って考察しておかなければならない。何故なら、こうした基礎的考察なくしては、「ヒュシス」および根源の意味での「自然」の問題を全面的に主題に掲げる所謂中期の論稿群の構想と位置づけも亦、その本来の姿に於いては解き明かされ得ることがないからである。我々は、かかる先駆的洞察に対する根拠を、暫定的に以下の点に求めておくことにする。すなわち、*phōsis* および *parad-neson* は、事柄に於ても（両者は語源的に同一の語根から派生する）、言葉の上で於いても（両者は語源的に同一の語根から派生する）、ともに同一の事象に属してゐるといふ事実が、それである。『精神現象学』および『形而上学』を論題とする一九四二—四三年の演習には、次のような指摘が見出される。「*phōsis* すなわち臨現するものが、*phōsis* として立ち現われて以来、臨現するものの臨現 (Das Anwesen des Anwesenden) は、ギリシヤの思索家たちにとっては *patheōsai* の内に、<sup>(5)</sup> 不覆蔵者がそれ自らを示してゐる現象である (das sich zeigende Erscheinen des Unverborgenen) の内に基づいてゐるのである。」現象 (*paradneson*) は、歴史的には存在そのものを名指す始源的な根源語 *phōsis* の一つの交遷形態である。だが、現象をめぐる問掛けは、ハイデガーの思索の行程内部に於いては、ヒュシスへの問いに至る先駆的形態に属してゐる。

## 注

- (1) 以下の引用は、すべて全集第二巻 (GA. Bd. 2) の頁付けを示すことにする。
- (2) 一九三六年から一九四六年に至る時期に書付けられた手稿『形而上学の超克』には、『存在と時間』に於ける「世界」の存在史の意味が「存在自体の真理が人間に対し非対象的在り方で現成(εἰς τὸν) die ungenständliche Wesung der Wahrheit des Seyns für den Menschen であることが告げられてゐる。VAI. S. 84. それ故「世界の世界性」とは、「世界が〈世界と〉」統(εἰς τὸν) das Walten der Welt (GA. Bd. 2. S. 118 R.) 「世界の世界性」 das Walten von Welt (VAII. S. 52; VAIII. S. 71) である。
- (3) GA. Bd. 9 (1929) S. 155A.
- (4) Vgl. GA. Bd. 20 (1925) S. 5.
- (5) Vgl. GA. Bd. 9 (1946) S. 329f. ; a. a. O. (1949) S. 373.
- (6) GA. Bd. 9 (1928/1964) S. 79.
- (7) Descartes, A-T, viii, p. 42.
- (8) GA. Bd. 9. S. 155A.
- (9) Vgl. GA. Bd. 2. S. 10R.
- (10) GA. Bd. 9. S. 133ff.
- (11) GA. Bd. 2. S. 51, 483f. ; GA. Bd. 9. S. 156ff. ; GA. Bd. 9. S. 115, 118.
- (12) この場合、超越および超越するものとは、存在者の側から思索されてゐる。存在は、超越することによって、しかも超越

することとしてそれ自身を示すのである。このことは、彼の思索が当時なおも形而上学の内部にとどまっていたことを意味する。

註。 GA. Bd. 9 (1946) S. 337.

(13) GA. Bd. 9, S. 189f.

(14) GA. Bd. 39, S. 76.

(15) a. a. O. S. 195.

(16) a. a. O. S. 259.

(17) NI, S. 211.

(18) O. Pöggeler, Der Denkweg Martin Heideggers, S. 218.

(19) GA. Bd. 5, S. 176.

(おくだ・みちのり)

筑波大学大学院哲学・思想研究科(在学中)